

# 沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

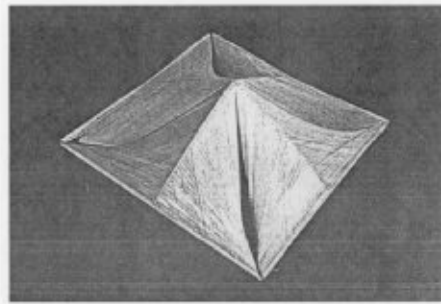
■ 4回 ■ 国場幸房(建築家)  
貴重な大高事務所での体験

前川國男がコルビュジェの事務所に手紙を送って返事をもらい、卒業式を待たずに大陸横断シベリア鉄道に乗りコルビュジェ事務所に入ったように、著名な事務所に入るには積極性と情熱を必要としたような話を数多く聞いていた。

その気概は前川の愛弟子であった大高事務所にも受け継がれていた。大高さんも三十六歳で事務所を開設し、スタッフの人たちにもいづれいろんな場で頑張つてほしいという考えが根底にあったようである。三三歳で定年というのもその考えの表れであったと思う。そこに入所を許された私自身もご多分に漏れず、その意志と情熱を受け継ぐように努力した。

笑い話になりかねないが、事務所内においても大高さんの一挙手一投足や所作に細心の注意を払い観察する日々であった。どのような時に咳払いをし、どのような時に頷くのか、等々、観察に勤しんでもいた。仕事中に製図板の後ろを大高さんが通り過ぎる時の張りつめた空気感。そのまま無言で通り過ぎると、やるせない気持ちになり、最初の一二年はそのような状態が

多かった。ある日、大高さんがあるエスキスを見つめ、「これ誰が描いたの」と言われたので、他の者が「國場君のです」と応え、頷かれた。その時の嬉しさと感激はいまだに憶えている。やはり一日も早く認めてもらいたいという一心でもあった。そのような毎日の積み重ねを、三年間という限られた時間を意識しながら勤めていた。大高さんの思想や建築に対する姿勢と表現までを、所員たちはどん欲に吸収していった。今に思えば、大高事務所での約五年間は私にとって、建築に対する基本的な関わり方や思想の形成の後ろ盾になっているのだと考えている。



コンペ「国立京都国際会館」で屋根、数多く種類のHPシェルの模型を作るので、30分で製作する方法を考えた。

そのような思いは私に限ったことではなく、建築の設計を目指す当時の若い人たちは、近代建築の明確さもあつたが、著名な事務所に入所するためにあらゆる努力を惜しまなかつた。そのようなアトリエ的な事務所は殆ど薄給に近い状況であつた。ちなみに僕の月の給料は一万参千円であり、大手のゼネコンクラスは約二倍であつた。給料云々よりも、憧憬する建築家の事務所に入所することを何よりも優先した時代だ

つたのである。  
一九六四年は東京オリンピックの開催年であり、次々と大規模の建築物が出来ていった。

先頃、亡くなられた世界的建築家の丹下健三氏の国立総合屋内競技場(代々木体育館)はその頃、丁度工事中であり、度々、事務所を抜け出して見学に行つた。あの恐竜の助骨を連想させるような工事中の屋根の鉄骨の伸びやかな曲線美の迫方に魅せられた。沖縄に帰るまでの五年間はメタボリとも重なり若手の著名建築家たちが活発な活動を展開している時期でもあつた。

一九六六年に完成した「国立京都国際会館」は戦後の日本における三大コンペの一つと云われ、一九五五年の応募作から大谷案が最優秀に選ばれた。直立の柱の概念を打ち破つた斜めの列柱による空間の構成は大胆さとスケール感のダイナミズムを感じさせる。↓

私が入所するや否や、「国立京都国際会館」の大きなコンペが始まり、六ヶ月間に渡るコンペに参加出来た事は大変貴重な体験であつた。コンペの最中、ある時、大高さんが「このコンペで優秀作品の四点に選ばれなかつたら俺は坊主になる」と言い出したようである。審査委員の丹下先生が、あるマスコミのインタビュウの席で「無名の建築家が当選することもあるのか」という質問に対し「それはあり得ない。必ず力のある人が当選するでしょう」と答えたという話を聞いた。その当時は、近代建築に対する評価がしっかりしていたので、先を読むことが出来たのでしよう。

コンペ作品を提出した後の、社内にて酒を飲みながらの打ち上げ宴をしていると、黒川紀章氏がコンペに提出した案を大高さんに見せに来た。氏が帰つた後暫くして評論家の川添登氏がいくつかの作品ニュースを仕入れて参加してきた。その中の一つである菊竹清訓さんの案の話しになった際に、大高さんはショックを受けたように見受けられました。しばらくして、トイレから戻ってこられ「ああ、菊竹は二番だね」と言われ、それから「のこりは、大谷だね」と言つた。その時、大谷さんの案はだれの情報にはありませんでした。審査発表の結果は、最優秀に大谷、大高、菊竹、菅原の四点が入り、最優秀に大谷案が輝いた。その時の予想的中したことにさすがに驚きと敬意を感じせざるにはおれなかつた。



「坂出の人工地盤」計画の模型、当時スタイルホームを使った模型はめずらしかつた

大高事務所での約五年間にわたる仕事や諸々の体験は、日本の先端に触れながらの刺激的で貴重な時間であつた。又、そこで知り合った多くの人たちも大切な至である。その体験を携え、一九六七年、希望と不安感を持ちながら沖縄に帰つた。